B.M. サリヴァン著

クリシュナ　ドヴァイパーヤナ ヴヤーサとマハーバーラタ

——新解釈への試み——

東洋学報

原　實

古来4 Vedaの分割者，第五のVeda Mahābhārata並びに膨大なPurāṇa文献の作者として知られるKṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsaは叙事詩それ自体の中にも登場して重要な役割を演じているが，これまでこの伝説的人物について纏まった研究を見なかった。その意味でこの題名を冠する本書の出版は当然の事ながら研究者の関心を惹く。以下に順を追って本書の内容を紹介する。

序論的な第一章は先ずVyāsaと彼の五大弟子（Sumantu, Paila, Vaiśaṁpāyana, Jaimini, Śuka）との関係，更に梵天勧請によるGaṇeśaの筆写物語を紹介するが，前者はもとよりこの叙事詩の口伝，後者は書写による伝承に関している。更にこれら伝承者以外に叙事詩に朗詠者として登場するSauti, Saṁjaya, Bhīṣmaに言及した後，近代の叙事詩成立に纏わる研究史に触れる。かくてここにM.Winternitz, E.W.Hopkins(analytic method), J.Dahlmann(synthetic method), V.S.Sukthankar, R.Goldman(Bhārgava), M.Biardeau(inclusive approach) J.A.B. van Buitenen, H.Gehrts, S.Wikander, G.Dumézil(transposition of pre-Vedic mythic themes), A.Hiltebeitelの研究が順次簡単に紹介される。

『自作中の著者』と題する第二章において著者は先ず叙事詩に語られるVyāsaの誕生を紹介する。曽てYamunā川を小舟で渡る時，聖仙Parāśaraは同乗の漁夫の娘Satyavatīに欲情を起し，彼女にその生来の魚臭を払い，川洲（dvīpa）における出産の後も再び処女性を回復するであろうと約して，霧を生じて彼女と交わった。誕生した子は黒色（kṛṣṇa）を呈していたから彼はKṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsaの名を得る。その後，彼は母Satyavatīの懇請によりVicitravīryaの二人の寡婦とその婢の胎に胤を降ろしてDhṛtarāṣṭra, Pāṇḍu, Viduraの父となり，かくて叙事詩の主役，敵対する従兄KauravaとPāṇḍavaの祖父となった。この出生の異常性（バラモンと漁夫の娘の子）にも拘らず，彼は叙事詩に在って他の著名なバラモン（Dhaumya, Nārada, Mārkaṇḍeya等）を圧して最も優

れたバラモンとなるが，著者は便宜上以下の4つの項目を立てて，Vyāsaの性格を論じる。

(1)『仙人』(ṛṣi)——人知の衰退を兆すKali期に於いて，もと唯一であったVedaを四つに分割(Veda-vyāsa)，且つ自ら所謂『第五のVeda』を創出して後者を4 Vedaに明るい5人の弟子に伝えた。天眼(divya-cakṣus)を具えたこの『仙人』は過去，現在，未来を透視し，他人の心中をはかり，兆を見ては吉凶を判じる。

(2)『祭官』(ṛtvij)——Pāṇḍava王子には宮廷祭官(purohita) Dhaumyaが仕えて，彼らの通過儀礼(saṁskāra)を執行するが，建国祭(在Indraprastha)，灌頂祭(rājasūya)，戦争犯罪浄化祭(aśvamedha)等の国家的な大祭にはVyāsaその人がBrahman『祭官』となって祭式の全体を統括している(Yājñavalkya = adhvaryu, Paila = hotṛ)。これら祭式の中でRājasūyaとAśvamedhaとは叙事詩大戦争の発端と終結に密接に係わっている。

(3)『苦行者』(tapasvin, yogin)——Bhagavadgītāの中でKṛṣṇaが『余は諸muniの中ではVyāsaなり』(10.37)という如く彼は就中『行者』であった。但し彼は世俗の秩序(dharma)維持を重んじ，物事を実践的に処理する(pravṛtti)林住者(vānaprastha)で，剃髪して荒行に身を挺し，以て解脱(mokṣa)遁世(nivṛtti)を求める隠遁者(saṁnyāsin)ではなかった。後者はむしろ彼の愛児Śukaによって体現される。但し彼の庵(āśrama)は特定されない。苦行の結果として彼は一切知を体得し，そのVedaの4分割，叙事詩の作成も苦行の結果であった。彼を念じる者にその姿を顕し，神出鬼没は彼の特徴となっている。

(4) Guru——彼はその5人の弟子のみならず，Kaurava(Dhṛtarāṣṭra と Gāndhārī)並びにPāṇḍava五王子(就中Yudhiṣṭhira)にとってよき助言者であり，彼らに哲学，宗教を教示した。しばしば，彼は彼らの願い事(vara)を叶えたが，彼に背く者(Aśvatthāman)には反対に呪いを発した。

章末はこれとは逆のVyāsa批判(Aśvaghoṣa, Daṇḍin)と擁護(Kumārila)に言及している。

第三章『神の計らい』——他面，Vyāsaは叙事詩における次下の三つの決定的事件に於いて重大な失態を演じ，関係者を破滅に導く。

(1)『王位継承不適格者の父』——母の懇請により既述の三人の女と交わってその胤を宿すが，誕生した者が盲人，白子，混血児で一人として王統を継ぐに相応しい者は無かった。この事実は次の世代，即ち孫の時代に王位継承問題を錯綜せしめ，それが結局親族を破滅に導くが，その悲劇の

因はその祖父 Vyāsa 自身にある。

(2) 『悪き祭式の結末』——Yudhiṣṭhira は Indraprastha に於いて即位式 Rājasūya を執り行う。この祭式は賭博儀式を以て完了し，それは通常覇王の勝利に帰するが，祭式の総監督 Vyāsa の不手際は即位式に王の国外追放という最悪の事態を招致した。

(3) 彼は不仲の Pāṇḍava と Kaurava の従兄弟の間をとりもって，悲劇の戦争を回避させようとしたが，その努力は悉く不毛に終り，結果は両軍の破滅となる。

既述の如く Vyāsa は偉大なバラモン，苦行者として全知全能でありながら，この三つの重大局面に於いて何故に失敗を繰り返したか。それは彼に特徴的な役割，即ち常に問題を惹起してはそれを取りなす『仲介者』(mediator) としての彼の性格に起因する。彼が敵対せしめた Pāṇḍava-Kaurava の従兄弟同士は叙事詩第15巻に於いて究極的に彼の『仲介』によって和解する。それは宗教史的には Viṣṇu 教と Śiva 教の和解であり，神話的には神々と悪魔の和解である。彼の Pāṇḍava-Kaurava 間の『仲介』は延びて Pāṇḍava と Pāñcāla (Draupadī の結婚式)，神と人，Dvāpara 期と Kali 期のそれに連なる。

この間に著者は G.Dumézil, S.Wikander, M.Biardeau A.Hiltebeitel の解釈を批判的に紹介し，基本的にはここに悪魔の跳梁による大地の重荷を軽減せんが為に，梵天が神々を地上に化身 (aṁśa, putra, avatāra) させる構図が存在すると言う。又，ここに Vyāsa (バラモン) と Kṛṣṇa (武士) との関係，3 Kṛṣṇa-s, Vaiṣṇava triad (p.73) 等の問題が論じられている。

『地上の梵天としての Vyāsa』と題する第四章は彼と梵天との類似を論ずる。彼は時に Nārāyaṇa の化身とされるが，それらは後世の追加部分に見えるのみで，機能的様相的に彼は寧ろ梵天に近く，その地上的 transposition と見做される。両者は正統バラモンの伝統の上に立って Veda を権威として (kārṣṇa veda, pañcama veda) 祭式を主宰し，遁世解脱 (nivṛtti, mokṣa) の理想よりも現世の秩序 (pravṛtti, dharma) を重んじた。梵天が loka-guru として神々と悪魔を創造し，しばしば後者の請いを容れては神界を混乱に陥れるのは，Vyāsa が Pāṇḍava-Kaurava の祖父として彼等を創造し両者を戦わすのと一般である。但し結局は神軍に勝利が帰する様に，地上にあっても Pāṇḍava が勝利し dharma が再建される。両者が共に『祖父』(pitāmaha) と称せられるのも故なしとしない。他に，同じく『祖父』と呼ばれる Bhīṣma (Kṣatriya) と Vyāsa (brahmin) の関係 (共に川の子) も論じられる。

第五章はその他の問題を取り扱う。叙事詩第16章に見える Kṛṣṇa の悲劇，Andhaka Vṛṣṇi 族の内紛は Kṛṣṇa Dvaipāyana (Kaṅha Dīpāyana) の呪いの結果として Pali Jātaka に 2 度言及され (454,530)，それは Artha-śāstra に符合を見る。但し叙事詩にあって Vyāsa はこの悲劇に直接関与しない。著者はこれらの異同のよって来る所を推論して，叙事詩の記述が歴史的に遅れるとなし，Kauṭilya-Jātaka-MBh の成立順序を推定している。著者は更に Kaṅha Dīpāyana の登場する Jātaka 444 の物語を紹介し，梵天勧請の経緯を論じて Vyāsa と仏陀との類似性を指摘している。

第六章　結論——著者の最も強調する所は上来しばしば言及した梵天と Vyāsa の共通点で，彼は Vyāsa を以て the earthly counterpart to Brahmā としている。然らば何故にこの共通点が叙事詩それ自体の中で強調されないのか。著者は両者に見られる元来の類似性が忘却の淵に投げ込まれたのは，梵天崇拝の衰退と Nārāyaṇa 信仰の隆盛というインド宗教史の趨勢の致す所であったとしている。Vyāsa が叙事詩の後世追加部分において Nārāyaṇa の化身とされたのもその故である。この内的矛盾は更に彼が一方において Veda 聖典の教授者，正統的祭式の執行者でありながら (pravṛtti)，同時に後世ヒンヅー教に特徴的な Yoga や苦行の実践者，一神教 (bhakti) の体現者とされる (nivṛtti) 事実にも看取される。

これを要するに本書の特徴は叙事詩全体の中から Vyāsa という神話的人物を抽出し，文献に即しつその人物像を整理して叙述した点にあり，著者 Sullivan の所説はその第六章，結論に集約されている。その解釈学的方法は読者に多くを教え，その洞察は時に鋭く説得力に富む。

但し，概してその叙述には文献学的正確さよりも，解釈学的器用さが顕著である。しばしば文中には当然引用さるべき重要な文献が欠如している。例えば第一章 p.11 に見える Gaṇeśa 書写物語の研究史も著者の考える程に簡単なものではない (M.Winternitz, Kleine Schriften pp.333ff., A. Getty, Gaṇeśa [Oxford 1936], p.3-4, H.Lüders, Kleine Schriften p.25, P. B.Courtright, Ganeśa [Oxford 1985] pp.151ff.)。第二章 pp.53-54 の Vyāsa 批判には O.Böhtlingk, Indische Sprüche 1624, 6001 の追加が可能である。第四章 pp.89ff.の pitāmaha の概念に就いては H.von Stietencron の研究 ("Die Rolle des Vaters im Hinduismus," Vaterbild in Kulturen Asiens, Afrikas, und Ozeaniens, Stuttgart 1979, pp.51-72) が参照さるべきである。第五章 p.106 の Nārada の性格規定にも問題がある (cf. Bālacarita 1.3-5 kalaha-priya, vairāṇi ca ghaṭṭayāmi)。p.108 の

faith は saddhā (J.4.34.15, 36.16-17, 24) の訳であるが，この語には H.-W.Köhler の研究 (Śrad-dhā, in der vedischen und altbuddhistischen Literatur, Wiesbaden 1973 [Spendefreudigkeit]) が当然参照されねばならない。のみならず，dhyāna は Pali の綴字に従って jhāna (J.4.36.22 and 25) とあるべきである。同ページの Vyāsa (Kanhādīpāyana) と仏陀の同一視の議論も説得力を欠く。蓋し，苦行者が在俗者より教示を受ける事は叙事詩に稀でなく，又 Jātaka に於いては善玉の主人公は悉く仏陀の前世となる故である。pp.13, 1-09, 114 に言及される梵天勧請について筆者も曽て仏典，MBh. Rāmāyaṇa に見える章句を比較したことがあるが，その結果は著者の言う程に単純ではなかった。ドイツ語綴字上の誤謬も看過しえない。p.116, note 9 に Oriental Literaturzeitung とあるのは Orientalistische Literaturzeitung でなければならない。

Bruce M.Sullivan, *Kṛṣṇa Dvaipāyana Vyāsa and the Mahābhārata: A New Interpretation*, E.J.Brill, Leiden, New York, Kφbenhavn, Köln 1990. pp.i-ix 1-132.